

大審院

裁判所

警視廳

一府縣

東京府

治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作リタル司法警察官ヲ證人トスルハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ

及ハス書記ノ次席ニ着テ陳述セシムヘシ此旨相達候事

◎司法省達丙第三十二號 明治十五年十月二十八日

大審院

裁判所

警視廳

府縣

東京府

總テ官吏ヲシテ職務ニ關スル事件ニ付證明セシムル爲メ其呼出ヲ要スルトキハ本年當省丙第十號達ニ準シ取扱フヘシ此旨相達候事

但巡查及ヒ等外吏着席ハ此限ニアラス

◎司法省達丙第二十二號 明治十五年六月十二日

(明治十五年十月二十四日司法省達第三十一號ニテ但書改正)

大審院

裁判所

警視廳

府縣

東京府

東京憲兵本部

治罪法第九十六條ニ從ヒ告發シタル官吏ヲ證人トシテ公廷へ呼出ス時ハ本年本省丙第十號達ニ準シ處分スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但巡查及ヒ等外吏ノ着席ハ此限ニアラス

第三節

法律上ノ代人及民事擔當人等ノ區別ノ件

◎布告第七十三號 明治十四年十二月二十八日

治罪法ニ於テ法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通

無能力者

一 未丁年者

二 妻タル者

三 白痴瘋癲者

四 治産ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
  - 二 夫タル者
  - 三 白痴瘋癲者ノ保管者
  - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人
- 民事擔當人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親族ニシテ監督ヲ爲ス者
  - 二 夫タル者
  - 三 白痴瘋癲人ノ保管
  - 四 雇主但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時
- 右奉 勅旨布告候事

第四節 在監人へ書類送達ノ件

◎第五八號兵庫仮留監伺 明治二十四年七月十七日  
刑事訴訟法第八十四條ニ拘留狀ヲ受クヘキ被告人既ニ監獄署ニ

在ルトキハ執達吏ヲシテ之ヲ本人ニ送達セシムヘシト有之抑モ在監人ニ係ル渾テノ書類送達上ノ件ニ付テハ舊治罪法施行中過ル明治十六年七月十四日司法省丙第四號ヲ以テ監倉若クハ獄舎ニ在ル被告人へ送達スヘキ渾テノ書類ハ裁判所ヨリ監獄署へ送達ノ手續ヲ囑託シ云云ト特達ノ儀モ有之候處刑事訴訟法施行ノ今日ニ在テハ尙ホ在監人ニ送達スヘキ渾テノ書類ハ依然丙第四號達ニヨリ可取行モノト存可然哉又ハ執達吏ニ於テ自カラ獄舎ニ付直接ニ本人へ送達スヘキモノニ候哉果シテ然ラハ自然檢束上ニモ影響ヲ及シ候ニ付其手當ヲ爲サ、ルヲ得ス如何相心得可然哉相伺候條至急何分ノ御指揮ヲ仰候也

◎司法省指令 明治二十四年九月十六日  
刑事訴訟法第八十四條ノ如ク特ニ送達方ヲ定メタル場合ヲ除クノ外ハ同法第十九條ニヨリ民事訴訟法第四百十條ノ規定ヲ準用スヘキ儀ト心得ヘシ

第五節 送達狀宣誓書類書式及用紙ノ件

◎司法省達丁第二十八號 明治十四年十二月十二日

大審院 裁判所

治罪法中ニ掲ケタル送達書呼出狀召喚狀拘引狀拘留狀收監狀及宣誓書式別紙ノ通相定候條右ニ照準スヘシ此旨相達候事

(別紙)

送達書

使丁(今ノ執達吏)之ヲ施行ス

呼出狀

全 上

召喚狀

全 上

拘引狀

書式略ス 巡查又ハ憲兵之ヲ施行ス

拘留狀

全 上

收監狀

全 上

宣誓書

◎司法省達丁第十六號 明治十八年八月十三日

大審院 裁判所

明治十四年當省達丁第二十八號送達書呼出狀召喚狀拘引狀拘留狀收監狀宣誓書式第一葉及ヒ明治十七年當省丁第八號達民事呼出狀並送達書書式第一號ニ用紙美濃紙ノ類ト記載有之候處右ハ半紙ヲ以テ換用スルモ苦シカラス此旨相達候事

第十四篇 民事訴訟法篇

第一節 民事訴訟法ノ件

◎法律第二十九號 明治二十三年三月二十七日

民事訴訟法

本文ハ追テ改正ノ上掲載スヘシ

第二節 差押金支拂計算方ノ件

◎福岡地方裁判所書記課甲第一三五號問合

明治二十五年十月二十八日

民事訴訟法第六百十八條末項一ヶ年間ニ參百圓ヲ超過スルトキ

ハ其超過額ノ半額ヲ差押フルコトヲ得トハ例ヘハ債務者年俸六百圓ノ人ニ對シ債權者ヨリ金百圓ノ差押ヲ求メ區裁判所ヨリ仕拂命令ノ交付ヲ受ケタル場合ハ右年俸四期ニ支拂フヘキモノナルヲ以テ一期分百五拾圓ノ内差押フ可カラサル參百圓ノ四分ノ一七拾五圓ヲ除キ超過額七拾五圓ノ半額即チ金參拾七圓五拾錢ヲ債務者ニ支拂フヘキヤ又ハ差押年度ニ於テ參百圓及ヒ超過額ノ半額百五拾圓ノ金高己ニ債務者ニ渡濟ナルトキハ單ニ百圓ヲ債權者ニ支拂フヘキヤ右ハ一般ノ慣例モ可有之ニ付及御問合候

◎司法省會計課長電信回答 明治二十五年十月三十一日  
前段意見ノ通り思料ス

第三節 不動産競賣代金ハ供託スルモノニアラサル件

◎盛岡地方裁判所書記課會第三二二號問合

民事訴訟法ニ依リ區裁判所ニ於テ執行シタル不動産ノ競賣代金

明治二十六年三月七日

ハ供託セシムヘキモノニシテ保管金ノ取扱ヲ爲スヘキモノニ無之ト思考候得共爲念及問合候

◎司法省會計課會檢甲第二〇五號回答

明治二十六年三月十四日

時ニ法律ニ規定アル場合ノ外ハ供託セシムヘキ筋ニ無之仍テ該代金ハ競落人ノ支拂ト配當實施ト全一期日ニ於テ取扱可相成義ト存候

第四節 裁判所及檢事局ヨリ在外領事ニ對スル直接通信ノ件

◎司法省訓令記甲第一二三一號 明治二十五年七月五日

裁判所 檢事局

本年(五月)第四號閣令ニ付外務大臣ト協議ノ上裁判所及ヒ檢事局ヨリ在外我領事ニ對スル通信ハ左ニ記載スル項ニ限り直接通信スルコトヲ定メタリ

- 一 訴答狀、召喚狀及呼出狀ノ送達
- 一 判決、決定命令及通知書ノ送達
- 一 前二項ノ外清國及朝鮮國駐在我領事ニ對シテハ猶左ニ記載スル事項ヲモ直接通信スルコトヲ得
- 一 長崎控訴院及同地方裁判所並ニ其管轄區裁判所ハ其現ニ取扱フ訴訟事件ニ付特ニ急速通信ヲ要スル事項
- 一 本年(二月)司法省參刑甲第四一號ノ乙訓令既決犯罪事件ノ通知ニ關スル事項但從前ノ指令訓令等之レニ牴觸スルモノハ總テ取消ス

第五節 民事訴訟法中ノ囚人ハ刑事被告人モ包含ノ件

◎申監第三號神奈川縣伺 明治二十五年六月十六日

民事訴訟法第四百十條囚人トアル中ニハ刑事被告人モ包含致候儀ト相心得可然哉至急御指示相成度此段相伺候也

◎内務省指令 明治二十五年六月二十八日

民事訴訟法第四百十條解釋ノ件伺ノ通

第六節 囚人領置工錢ハ差押ヲ拒ムコトヲ得ル件

◎北海道集治監伺 明治二十八年七月十日

領置工錢ハ差押ヲ拒ムヲ得ヘキヤ至急御指令アリ度

◎内務省電信指令 明治二十八年七月十日

領置工錢ノ件ハ民事訴訟法第六一八條第六ニ差押之拒ムコトヲ得

第七節 假住所選定ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合

本人ノ都合ニ依リ書類ノ送達ヲ受取ルニ差問ナキ爲メ假住所ヲ裁判所ニ届出タル者其後別ニ送達書類ヲ受取ルヘキ代理人ヲ任シ置カスシテ一時他出スルカ或ハ本籍地ヘ歸宅シタル時ハ執達吏ハ書記ニ其旨ヲ通知シ民事訴訟法第四百十三條第三項ヲ適用シテ可然旨民事訴訟法解疑並ニ執達吏事務練習筆記ニ明瞭ナル

モ若シ送達ヲ受クル者カ執達吏職務細則第二條ノ管轄内ニシテ一里未滿ノモノ迄モ假住所選定ノ届出ヲ爲シタル者ニ對シテハ悉ク郵便ニ付スルモノナルヤ將々裁判所構成法第九十七條ノ管轄外ノ者ニ限ルヤ又右裁判所所在地トハ裁判所ノ管轄内ヲ指スモノナルヤ又市郡内ナルヤ或ハ村内ト云フカ如ク狹ク解釋スヘキモノニ有之候哉

◎執達吏傳習教官今村信行回答

民訴第四百四十三條第一項ニ謂フ所ノ「受訴裁判所ノ所在地」ハ裁判所構成法第九十七條ノ規定ニ於ケル管轄ヨリモ其範圍狹隘ニシテ例ヘハ沼津區裁判所カ受訴裁判所ナレハ沼津町丈ケヲ指シ鹿兒島地方裁判所カ受訴裁判所ナレハ鹿兒島市丈ケヲ指ス故ニ其裁判所ノアル市若クハ町ノ内ニ假住所ヲ定メス又ハ之ヲ定ムルモ後ニ立外キタルトキハ假令其本籍ハ各市町等ヨリ壹里以内ノ地ニアルモ民訴第四百四十三條第三項ノ規定ニ依ラサルヲ得ス◎執達吏和久利銀次郎問合 前項假住所ノ地假令ハ旅人宿トセ

ンニ執達吏ハ其旅人宿ニ至リ送達ヲ施行セントスルニ際シ宿主ハ私方ハ決シテ假住所タルコトヲ任諾シタルコトナク又滞在セシメタルコトナク現ニ本籍地ニ居レリ故ニ私ニ於テ合意セサル以上ハ實際裁判所ヘ不實ノ事ヲ届出タルモノニシテ畢竟不正ノ届出ナレハ取消アルヘシト申立ツルトキハ執達吏ハ其届出ノ不正タルコトヲ現ニ認メタル以上ハ書記ニ其旨ヲ通知スヘキモノナルヤ將々不正ノ届出タルヲ認知シタルニモ拘ハラス尙ホ正當ノモノトシテ取扱フヘキモノニ有之候哉

◎執達吏傳習教官今村信行回答

前段御見込ノ通り書記ニ通知シ可然

◎執達吏和久利銀次郎問合

民事訴訟法第四百四十三條ノ假住所選定ノ届出ハ成ルヘク早キチ宜シク遅クトモ最近ノ口頭辯論アル迄ニ爲スヘキ猶豫ヲ與ヘリ然レモ其者カ届出ツルヲ欲セサルノ場合モアラシテ法律ハ之レカ届出ヲ強ヒス只必要ナル片ニ限ルトハ民事訴訟法註解ニ明

瞭ナリ案スルニ假住所ヲ届出ツルハ通常訴訟手續即チ口頭辯論ニ必要ナルモノ、ミ之レニ反シ口頭辯論ナキモノハ敢テ届出ヲ爲スノ必要ナキモノ、如シ然ルニ今支拂命令申請者アリト假定セシニ其申請ノ當時ハ果シテ口頭辯論ノ爲生スルニ至ルヤ否ヤハ今ヨリ豫想スルコト能ハサル如キ即チ簡易ノ訴訟手續（民事訴訟法第三百九十條ノ場合ニ至リタルトキハ除ク）ノ口頭辯論無キモノ迄假住所ヲ届出ツルモノニ有之候哉

◎執達吏傳習教官今村信行回答

民事訴訟法第四百三十三條條中ニ假住所選定ノ届出ハ遅クモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲ス可シトアルハ猶豫ノ極端ヲ云ヒタルモノニシテ一般ニ書面ヲ提出ノ際共ニ之ヲ爲スチ通例トス殊ニ支拂命令ノ申請ヲ爲スカ如キ場合ニハ其申請ト同時ニ假住所ノ届出ヲ爲サ、ル可カラス何トナレハ口頭辯論ヲ爲スニ至ル前ニ債權者ニ對シ通知ヲ要スル場合アレハナリ（民事訴訟法第三百八十七條第二項参照）

第八節 送達施行ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合

訴訟書類ヲ受取ルヘキ甲ハ送達ノ當日ヨリ以前他ニ轉籍ノ届出ヲ爲シ町村役場ハ直ニ轉住地ヲ管轄スル町村役場へ送籍ノ手續ヲ爲シタルモ送達ノ當時迄ハ入籍スル町村役場ヨリ入籍ノ報知書到着セサルカ故原籍町村役場ニ於テハ送籍ノ手續中ナルモ全ク除籍スル能ハス此間（送籍ノ手續ヲ爲シタル日ヨリ除籍スル日マテ）ニ於ケル送達ヲ爲スニ際シ執達吏ハ原籍地ニ於テ民事訴訟法第四百十五條ノ規定ニ依リ送達ヲ施行シ可然哉

◎執達吏傳習教官今村信行回答

民事訴訟法第四百十五條等ニ住居トアルハ本籍ノアル所チ差スノ意ニ非ス故ニ其送達ヲ受クヘキ者ノ住居セサル所ニ於テ同條項ノ規定ヲ適用シテ送達ヲ爲スコトヲ得ス

◎執達吏和久利銀次郎問合

甲乙丙三人ノ一家族アリ此内ヨリ乙丙ノ二人ハ甲ト同番屋敷内ニ分家ノ体裁ヲ爲シタリ(表面上分家ノ手續ヲ履行シアルモ現實甲トハ同居同炊ナル事實ハ執達吏ハ勿論隣家ノ者並ニ所屬町村長ニ於テモ亦同居親族ナリト証明セリ)此時ニ際シ甲ニ對スル訴訟書類送達ノ爲メ甲ノ家ニ到リタルニ甲ハ前項第四問ノ如ク他ヘ轉籍シ在住セサル故ヲ以テ乙丙ニ於テ送達書類ノ受取ヲ拒ミタル時ハ乙丙ハ甲ノ同居親族ナリトシ執達吏ハ民事訴訟法第四百九條ノ規定ニヨリ送達ヲ施行シ可然哉

◎執行吏傳習教官今村信行回答

戸籍ニ關係ナキニトハ前問ニ封スル答案ニテ會得セラレタシ實際同居ノ親族タルトキハ質議者ノ意見通りニテ可ナラン

第九節 召喚狀ハ郵便送達ニ依ルコト能ハサルノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合

勾留狀ヲ受クヘキ被告人在監セシ時ハ執達吏ニ限り送達スヘキ

旨刑事訴訟法第八十四條ニ規定シアリシカ全法第七十六條第三項ニ規定セル召喚狀ハ郵便送達ニ依ラス又里程ノ遠近ニ拘ハラズ必ス執達吏ニ依ラサレハ送達ノ効ナキモノナルヤ

◎執達吏傳習教官今村信行回答

御質議ノ通りナラン

第十節 普通送達ト郵便送達トノ區別ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合

民事訴訟法第三百三十六條ノ民事ニ係ル訴訟書類ノ送達ハ「訴訟費用減少ヲ謀ル爲メ送達費用拾參錢以外ヲ要スル場合ハ當事者ノ申立アル以上ハ其申立ニ從ヒ必ス郵便ニ依ル送達ヲ爲スヘキモノニシテ若シ一ケ年手數料百八拾圓ニ達セサルトキハ執達吏規則第十九條裁判所構成法第九十六條ノ規定ニヨリ其不足額ハ國庫ヨリ補助セラレヘキモノナルヤ」或ハ裁判所構成法第九條全法第九十七條全法第九十八條ノ本文ニヨリ送達費用拾參錢以



ト雖モ地方裁判所管轄内ハ假令當事者ハ郵便送達ノ申立ヲ爲スモ郵便送達ハ從タルモノニテ執達吏ハ主タル裁判所ノ機關者ナリ殊ニ裁判所構成法第九十九條全法第九十四條ノ規定ニヨリ執達吏ヲ置カレタル以上法律ノ許ス限リハ裁判所書記ハ職權ヲ以テ執達吏ニ依ル送達ヲ爲シ可成手数料ノ多カラシトニ保護シ彌ヨ百八拾圓ニ達セサル時ニ限リ其不足額ヲ補助セラルヘキ法律ノ精神ナルヤ

◎執達吏傳習教官今村信行回答  
手数料百八拾圓ニ達スルト否トニ依リ郵便ニ依ル送達ヲ取捨スヘキモノニ非スト思考ス

第十一節 一家族不在ノ差押ニ際シ無財産ナルトキ債務者ニ通知ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合  
一家族不在ニシテ証人立會ノ上財産ヲ差押タル場合ハ調書ノ謄

本等ヲ送達シテ差押ヲ爲シタル旨ヲ債務者ニ通知スルノ規定ナリ然ルニ之レニ反シ証人立會ノ上取調タルニ差押フヘキ物件アラサルカ故ニ差押ヲ爲サハルトキハ家宅ヲ搜索シタル旨ヲ債務者ニ通知セサルモ可ナル哉

◎執達吏傳習教官今村信行回答  
質議者ノ意見通りニテ可ナラン

第十二節 差押タル物件ニテ執行費用ヲ償ハサル場合處理方ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合

差押フ可キ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ強制執行ヲ爲スコトヲ得サルハ民事訴訟法第五百六十四條第三項執達吏職務細則第五十八條第二項ノ規定ナク然ルニ今假ニ最初強制執行々爲ニ際シテハ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込アルヲ以テ執達吏ハ債務者ノ所有財産ニ對シ直チニ強

制執行處分ヲ實施シタル者アリ其後競賣期日ニ至リ競賣地ニ臨場シ其準備ヲ爲シタルニ競賣申出人更ニ來場セサルヲ以テ止ムヲ得ス當日ノ競賣ヲ中止シ尙ホ再競賣期日ニ至リ競賣ノ申出ヲ催告スルモ更ニ競賣ヲ申出ツル者ナシ債權者モ亦競落ヲ欲セサルヲ以テ再ヒ競賣ヲ中止シタル玆ニ於テ再競賣實施ノ爲メ二回ノ臨場旅費ヲ増加スルノ場合ニ至ルヲ以テ終ニ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキニ至レリ要スルニ強制執行ハ債權者ノ權利ヲ全フセシムルノ方法タルニ過キサレハ若シ之レヲ行フモ徒ニ苦痛ヲ債務者ニ加フルニ止マリ權利者ニ益スル處ナキニ於テハ所謂勞シテ効無キノ業ニシテ法律ノ意ニ反スルモノナラン故ニ本案ノ如キ場合ニ於テハ執達吏ハ債務者ニ強テ競買ヲ爲サシムルモノナルヤ將々單ニ第五百六十四條第三項ニ立戻リ其差押タル財産ハ解放シ債務者ニ還付スヘキモノニ有之候哉

◎執達吏傳習教官今村信行回答  
末段御見込ノ通りニシテ可ナラン

第十三節 疊襖等ヲ家屋ノ附屬物トシテ登記シタルトモ効力ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合  
疊襖ノ如キ動産物ヲ家屋ノ附屬物トシテ登記簿ニ所有權ヲ記入スル以上ハ不動産物ト同一ニ第三者ニ對抗スル効力アルヤ否ヤ

◎執達吏傳習教官今村信行回答  
御質議之通り不動産ト同一ナルヲ勿論ナリトス

第十四節 船舶ニ對スル執行方ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合  
船舶ニシテ端舟其他櫓權ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ櫓權ヲ以テ運轉スル舟ハ動産トシ其他ハ不動産ノ強制競賣ニ關スル規程ニ從フ云々民事訴訟法ニアルモ實際動産ト不動産トノ區別甚タ判然ナラス思フニ船長船員等之ニ住シ殆ント家屋ト等シキ帆

船其他ノ船舶以上ヲ不動産トスルモノナルヤ將タ石數ヲ以テ區別スルモノニ有之候哉

◎執達吏傳習教官今村信行回答

船舶ハ民法上總テ動産ナリ然ルニ民事訴訟法ニ於テ商船及ヒ海船等ハ不動産ニ對スル強制執行ノ規定ニ從ヒ強制執行ヲ爲スト定メシ所以ハ是等ノ船舶ハ重大ナルモノニシテ普通動産ト同一ニ取扱フコトヲ得サルカ故ナリ而シテ如何ナル船舶カ商船若クハ海船ト稱ス可キヤハ商法ノ規定ニ依ル（商法第八百廿四條以下參照）

◎執達吏和久利銀次郎問合

民事訴訟法第七百十七條第二項ニヨリ執達吏カ端船小舟ヲ差押タルトハ登記簿ニ差押タル旨ヲ記入スル爲メ并ニ其差押タル端船小舟ヲ競賣ニ付シタルトキハ登記簿ニ競賣ニヨリ所有權ヲ得タル旨ヲ記入スル爲メ民事訴訟法第五百四十三條ノ規定ヲ準用シ執達吏ハ其管轄裁判所ノ共力ヲ求ムヘキ旨法曹記事第一號ニ

指示セリ然ルニ（其物件ハ執達吏カ差押ヘサル以前ニ於テ他ヘ書入抵當ト爲シタル物ナリ）此競賣代金ニ對シ抵當債權者ハ一般ノ債權者ヲ排除シテ執行力アル正本ニヨラサルモ優先ノ辨濟ヲ請求スル權利アルヤ或ハ端船小舟ハ動産ナルカ故民法第三百五十二條ノ規定ニヨリ其實物ヲ現實ニ占有スルニアラサレハ單ニ登記簿ニ記入ノミニテハ第三者ニモ他ノ債權者ニモ對抗スルヲ得サルヤ

◎執達吏傳習教官今村信行回答

船舶ハ端船小舟ト雖モ登記シタルトハ其抵當債權者ハ執行力アル正本ヲ有スルト未タ之ヲ有セサルトニ論ナク優先權ヲ有シ第三者ニ對抗スルコトヲ得ヘシ

第十五節 強制執行上責任其他重要ノ件

茲ニ一ノ動産物アリ債權額拾圓ノ強制執行事件債權者ノ委任ニヨリ有体動産差押ニ際シ債務者ヨリ此動産ハ私ニ於テ調製シタ

ル占有物ナレハ本日マテ使用收益處分ヲ爲シ居ル物ニ相違ナキニ付他ノ動産物ヲ除キ是非トモ此動産物ヲ差押ヘアラソコトヲ願望シタリ依テ

(一) 執達吏ハ他ノ財産ヲ除キ債務者ノ請求ニ任セ其動産見積金拾圓ノ物壹點ヲ差押ヘ執達吏之ヲ占有シタリ然ルニ

(二) 其後第三者ヨリ民事訴訟法第五百四十九條全法第五百五十條ノ手續ヲモ爲サ、ル故終ニ

(三) 競賣期日ニ至リ競賣處分實施シタルニ其差押ヘタル動産ハ金拾貳圓ニ競賣申出人アリタルニヨリ金拾貳圓ニ競落シタリ依テ

(四) 執達吏ハ其差押物ヨリ賣得シタル金拾貳圓ノ内強制執行費用金壹圓ヲ執達吏先取扣除シ次ニ債權額拾圓ヲ債權者ニ引渡シ殘餘金壹圓ハ剩餘シタルヲ以テ債務者ニ還付シ茲ニ本件ヲ完結シタリ然ルニ

(五) 競賣期日ヨリ壹ヶ月餘ヲ經過シ債務者ハ前項ノ剩餘金壹圓ノ還付ヲ受領シタルニモ拘ハラズ第三者ト共謀シ債務者ヘハ竊盜罪ヲ受クルヲ覺悟シ以テ其競賣物ハ第三者ノ物ナルヲ債務者カ自己ノ占有物ナリト申立執達吏ヲシテ差押競賣ニ付セシメ債權者ノ債權ニ充テタルモノニシテ實際第三者ノ物ヲ債務者カ竊取シタルモノ、如ク虚偽ノ意思表示ヲ以テ第三者ヨリ債務者ニ對シ告訴ヲナシ其競賣物ヲ競落人ヨリ取戻シ其財産ハ第三者ト債務者トニ於テ分配セントノ惡意ヲ出シ茲ニ一決シタリ依テ

(六) 第三者ヨリ債務者ヲ被告トナシ執達吏カ執行シタル動産物ハ全ク第三者ノ所有物ナルヲ債務者カ竊取シタルモノナリト虚偽ノ意思表示ヲ以テ告訴ヲ提起シタリ而シテ其告訴ノ罪ハ構成スルヤ否ヤハ事實問題ニ屬スルハ勿論執達吏ニ無關係ナルヲ以テ之ヲ有畧ス

(七)

若シ債務者ト第三者ト通シテ虚偽ノ意思表示ハ無効ナルカ故善意ニテ差押タル執達吏並ニ競落人ニハ對抗スルコトヲ得ストセハ更ニ疑問ノ生ス可キ筈ナキモ

(八)

假ニ其競落物ハ第三者ノ物ニテ全ク窃盜品ナリト判定セレ 務者ニ對シ窃盜罪ヲ言渡サ、タリト假定セハ疑左ノ參問ヲ生スルニ至レリ

◎執達吏和久利銀次郎問合

第三者タル被害者ハ其動産物ノ返還即チ占有回收及ヒ損害賠償ヲ請求スル訴ハ惡意ニテ占有セシ債務者タル窃盜者ニ對シテ提起スルモノナルヤ

◎執達吏傳習教官今村信行回答

果シテ債務者タルモノ、窃盜ニ係ルニト判然タル上ハ第三者ハ債務者ニ對シ損害賠償ヲ請求シ得ヘキトハ勿論ナリトス

◎執達吏和久利銀次郎問合

其盜品ハ本來競賣處分ニヨリ競落人ハ善意ニテ且過失ナク競買

シタルモノニテ其動産ノ上ニ行使スル權利ヲ取得スル以上ハ第三者タル被害者ヨリ競買シタル代金拾貳圓ヲ辨償シ及ヒ其物件ノ保存ノ爲メ等ニ費シタル金額ノ償還ヲ受領セサル限りハ其競買物ヲ返還スルコトヲ得サルモノナルヤ

◎執達吏傳習教官今村信行回答

御質議ノ通リナラン

◎執達吏和久利銀次郎問合

右執達吏カ差押タル動産物ハ債務者ノ陳述ヲ斟酌シ其願望ニ任セ差押タルモノナレハ執達吏カ執行シタル職務上ノ義務行意ニ付テハ更ニ違背ナキハ勿論被害者ヨリハ競賣期日前ニ於テ異議ノ申立モナク債務者モ亦賣得金ノ剩餘ノ返還ヲ受領シ(殊ニ本件ハ民事々件ナルカ故)タル以上ハ執達吏ハ毫モ過失ナキカ故前二項ノ責任ヲ免カル、モノナルヤ(民事訴訟法第五百四十四條第五百四十五條第五百四十九條)  
◎執達吏傳習教官今村信行回答

執達吏ニ毫モ過失ナケレハ責任アルヘキ理ナシ

第十六節 被差押者タル本人死亡他ニ承繼人アラサル  
場合差押物件還付方ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合  
獨身者所有ノ有体動産ニ對シ四月一日仮差押ヲ爲シ執達吏之ヲ  
保管シタリ然ルニ五月一日被差押者タル獨身者ハ死亡シタリ  
其後五月廿五日ニ至リ差押申請者ハ假差押取消命令正本ヲ以テ  
差押タル財産ヲ被差押者タル獨身者ヘ還付アラントテ申出タル  
場合ハ執達吏カ差押タル物件ハ其地ノ市町村長ニ還付シ可然哉  
◎執達吏傳習教官今村信行回答  
相續人即チ承繼人アレハ承繼人ヘ還付スヘク若シ然ラザレハ御  
見込ノ通り

第十七節 假差押物件解除ノ手数料徴否ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合  
有体動産假差押ノ爲メ(差押ノ執務時間ニ時間ヲ要シタリ)封印  
ヲ施シタル物件ヲ後日取消トナリ封印解除ノ上(執達吏ノ手數  
料規則第十二條第四號末段)債務者ヘ還付スル爲メ封印解除ニ  
一時三十分間ヲ要シタリ此解除ノ執務時間ニ對シテハ無手数料  
ナルヤ將差押時間ト解除時間トヲ通算シ執達吏手数料規則第三  
條末項ニヨリ通算スヘキモノナルヤ  
◎執達吏傳習教官今村信行回答  
仮差押ノ解除ハ差押物ノ還付即チ執達吏手数料規則第十二條第  
四號ニ該當ス

第十八節 執行力正本ノ末尾ニ記載方ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合  
民事訴訟法第五百三十五條ニ前略又其義務ノ一分ヲ盡シタルト  
キハ執行力アル正本ニ其旨ヲ附記シ且受取ノ証ヲ債務者ニ交付

ス可シ云々トアルヲ見レハ執行正本ハ債權者へ交付スルカ如ク見エシカ「其旨ヲ附記シ」ノ下へ「債權者へ還付シ」ノ七字ヲ挿入アルモノト見ルノ精神ナルヤ

◎執達吏傳習教官今村信行回答  
御見込ノ通り

第十九節 不動産強制競賣實施方ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合  
民事訴訟法第六百五十九條第二項後段ノ場合即チ裁判所外或ル場所ニ於テ不動産ノ強制競賣ヲ爲スニ際シ假令ハ筆數多ク爲メニ到底民事訴訟法第六百五十八條第五號ノ日時ヨリ同日ノ日没迄ニ競賣ヲ終局スルコトヲ得サル時又ハ甲ノ畑地ハ乙ノ宅地ト合併シ丙ノ本家ハ丁ノ土藏ト合併セサレハ一筆宛ニテハ到底第六號ノ最低競賣價格ヲ得ル見込ナキ等ノ場合アリト認ムルハ執達吏ハ數筆ヲ合併シ其最低競賣價格モ亦合併シテ競賣スルト

キハ差支無之ヤ若シ合併スルコトヲ得サルモノトセハ日没ニ至レハ一旦中止ノ上民事訴訟法第五百卅九條ニヨリ夜間執行許可ノ命令ヲ受クルカ或ハ日没ニ至テハ終局シ殘餘ノ物件ハ翌日之ヲ續行スヘキモノニアラサレハ民事訴訟法第六百七十條ニヨリ更ニ新競賣期日ヲ定メタル上ニアラサレハ競賣スルコトヲ得サルカ如キ不都合アリ特ニ必ス一筆毎ニ競賣スヘク決シテ合併スルコトヲ得ストノ特別條件ノ明文ナキ以上ハ合併スルモ敢テ差支ナキ法意ナルヤ

◎執達吏傳習教官今村信行回答

執行裁判所ノ職權ニ屬スヘキ執行ヲ此競賣ヲ爲ス行爲ニ限リ其命令ヲ受ケテ執達吏カ爲スニ過キサルモノナレハ總テ執行裁判所ノ指揮ニ從ヒ之ヲ爲サル、ヘカラス  
蓋シ不動産ノ數筆ヲ合シテ競賣ニ對スルカ如キハ適法ト云フヲ得ス但利害關係人カ一致ノ合意アルトキハ格別ナラン

第二十節 執達吏任用方諸願ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合

甲地ノ執達吏ヲ辭シテ更ニ乙地ノ執達吏ヲ請願スル場合ニハ轉補願ニヨリ轉補ヲ命セラレタル時ト同ク執達吏登用規則第廿一  
察ノ規定ハ再應適用スヘキモノニアラスヤ

◎執達吏傳習教官今村信行回答

管督官ノ意見ニ任スヘキモノタリ

第十五篇 公證人規程篇

第一節 公證人規則ノ件

◎法律第二號 明治十九年八月十一日

公證人規則

第一章 總則

第一條 公證人ハ人民ノ囑託ニ應シ民事ニ關スル公正證書ヲ作  
ルヲ以テ職務ト爲ス

第二條 公證人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正證書又ハ他ノ

官吏ノ作ル可キ公證書類ヲ作ルコトヲ得ス若シ之ヲ作リタル  
トキハ公正ノ効ヲ有セス

第三條 公證人ノ作リタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ其正本

ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スル力アルモノトス但刑事裁  
判所ニ偽造ノ訴アルハ其證書ノ執行ヲ中止スヘシ又民事裁  
判所ニ偽造ノ申立アルハ其證書ノ執行ヲ中止スルコトヲ得

第四條 公證人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内

ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ住居シ其居宅ニ役  
場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フ可シ但シ役場外ニ住居セント  
スルトキハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ受ク可シ

已ムヲ得サル事件ニ付テハ受持區内ニ限リ役場外ニ於テ其職  
務ヲ行フ可シ

第五條 各區内公證人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム

第六條 公證人ハ司法大臣ニ隸屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監



督ヲ受クルモノトス

第七條 公証人其受持區内ニ於テハ區外人ノ爲メニモ職務ヲ行フ可シ但受持區外ニ於テハ何人ノ爲メニモ職務ヲ行フコトヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス

第八條 公証人ハ理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキ囑託人ノ求メアレハ其理由ヲ記シテ渡ス可シ

第九條 公証人ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十條 公証人ハ公証人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作リ其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管轄始審裁判所及治安裁判所ニ差出ス可シ

前項ノ印鑑ヲ差出サ、ル間ハ職務ヲ行フコトヲ許サス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス

第十一條 公証人已ムヲ得サル事故アラテ職務ヲ行フコト能ハ

サルトキハ近隣ノ公証人ニ代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出可シ

第十二條 公証人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲ爲サシムルコトヲ得

第十三條 公証人ノ作ル證書及謄本ノ用紙ハ某始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル野紙ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

第一 原本證書ノ本紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ

第二 正本原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ願出可キ旨ヲ其末尾ニ記載シタルモノ

第三 抄録正本原本ノ一部分ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正式謄本原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第五 抄録正式謄本原本ノ一部分ヲ抄審シタルモノニシテ原

本ニ代ヘ得可キモノ

第六 謄本原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

第七 抄録謄本原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノ

第八 見出帳日々授受シタル書類ノ番號種類等ヲ順次ニ記入  
スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ本書ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ  
公證ヲ受クル爲メノ外裁判所ノ命令ニ依ルニ非サレハ役場外  
ニ出スコトヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ謄本ヲ  
渡スコカラス

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩スコカラス

第二章 公證人ノ選任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

第一 滿二十五歳以上ナル事

第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事

第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事但裁判官檢察官タリシ

者及法學士法科大学卒業生代言人ハ此條件ヲ要セス

第十九條 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有スル事

保証金ノ額ハ土地ノ狀況ニ從ヒ貳百圓以上五百圓以

下ニ於テ豫メ司法大臣之ヲ定ム

第二十條 左ニ掲クル者ハ公證人タルコトヲ得ス

第一 公權剝奪若クハ停止中ノ者

第二 盜罪詐欺罪賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ  
受ケタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四 官吏懲戒令ニ依リ免職セラレタル者

第二十一條 公證人ヲ試験スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ

少クモ二箇月前ニ告示ス可シ

第二十二條 試験委員ハ控訴院若クハ始審裁判所ノ裁判官二名

檢察官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ス

第二十三條 試験ノ科目ハ公證人規則、民法、訴訟法、商法其他  
公證人ノ職務ニ關スル法律命令トス

第二十四條 公證人タラント欲スル者ハ願書ニ試験及第證書ノ  
寫ヲ添ヘ管轄始審裁判所若クハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出  
ス可シ但裁判官檢察官タリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法  
科大學卒業生ハ其卒業證書代言人ハ其免許狀ヲ以テ及第證書  
ニ代フルコトヲ得

第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ス

第二十六條 試験ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試験ニ合格  
セサル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二十七條 試験及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第三章 證書

第一節 證書ノ原本

第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑託人ノ氏名ヲ知り面識  
アルヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルト

キハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラス面識ナキトキハ其本籍或ハ寄留  
地ノ郡區長若クハ戸長ノ證明書又ハ公證人氏名ヲ知り面識ア  
ル丁年者二人以上ヲ以テ其人ヲ證セシム可シ之ニ違ヒタルト  
キハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第二十九條 左ニ掲クル者ハ立會人タルコトヲ得ス

第一 公證人及囑託人ノ親屬雇人又ハ公證人ノ筆生

第二 第二十條ニ掲クタル者

第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件々ヲ記載ス可シ

第一 囑託人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齢

第二 囑託人代理人ナルトキハ委任狀ヲ所持シタルコト及其  
本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第三 囑託人後見人ナルトキハ後見人タルノ證書ヲ受持シタ  
ルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第四 郡區長ノ證明書ヲ以テ證シタルトキハ其旨又證人ヲ要

第五 證書ヲ作リシ場所及其年月日若シ場所ヲ記セス又ハ年月日ノ記入ヲ脱遺シタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

シタルトキハ其族籍住所職業氏名年齢

第三十一條 證書ヲ作ルニハ通普平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要ス接續ス可キ字行ニ空白アルトキハ墨線ヲ以テ之ヲ接續ス可シ

數量並ニ年月日ヲ記スルニハ壹貳參肆伍陸漆捌玖拾陌阡萬ノ字ヲ用フ可シ

第三十二條 度量衡貨幣ノ數量・名稱及法曆ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ記ス可シ

既ニ廢シタル度量衡・貨幣、曆法又ハ外國ノ度量衡・貨幣、曆法ヲ記セサルヲ得サル場合ニ於テハ之ヲ用フルコトヲ得

第三十三條 證書ニ追加改正ヲ爲ストキハ其文字並ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人

並ニ關係人捺印ス可シ又文中消字ヲ爲ストキハ其原字ノ尙ホ明カニ讀得可キコトヲ要ス且何行ニ若干字ヲ消シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ追加、改正、消字ノ効ヲ有セス

第三十四條 證書ヲ作リタルトキハ關係人ニ讀聞セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並ニ關係人各自署名捺印シ公證人ハ某治安裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ  
公證人並ニ關係人ノ署名捺印ナキトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

若シ署名捺印スル能ハサル者アルトキハ明治十年第五十號ノ布告ニ從フ可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ其公正ノ効ヲ有セス

第三十五條 證書ノ綴目合目ニハ公證人並ニ囑託人之ニ捺印ス可シ

第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルコトヲ得

ス其親屬他人ノ代理人タルトキモ亦同シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セス

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メ訴訟代人若クハ代言人ト爲リ又ハ爲リタルコトアルトキハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ作ルコトヲ得ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セス

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益アル條件ヲ證書中ニ記ス可カラス若シ之ヲ記シタルトキハ其條件ハ無効トス

第三十九條 公證人ハ證書ノ原本ヲ保存ス可シ若シ之ヲ保存セズ又ハ亡失シタル場合ニ於テ第四十七條ノ手續ヲ爲サ、ルトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セス

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルトキハ其委任狀又ハ其證書ノ寫ヲ原本ニ連綴ス可シ其寫ニハ本書ト對照シ相違ナキ旨ヲ附記シ公證人並ニ關係人署名捺印シ其寫ト本書トニ割印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連綴スルコトヲ得之ヲ連綴シタルトキハ其旨ヲ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼附ス可シ

第二節 正本及謄本

第四十三條 正本ハ數量ノ定リタル金錢其他換用物若クハ有價證券ノ支辨ニ限リ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ之ニ違ヒタルトキハ正本ノ効チ有セス

正式謄本及抄録正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ  
第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作りタル後ニ於テ之ヲ作ルコトヲ得原本ト同時ニ作ルトキハ關係人ノ面前ニ於テシ原本ヲ作りタル後ニ作ルトキハ更ニ義務者ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セサルトキハ正本又ハ正式謄本ヲ求ムル者ヨリ管轄始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ

公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記一員ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ之ニ違ヒタルトキハ其効チ有セス  
裁判所ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルトキハ其末尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ連續スヘシ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルトキハ第三十一條第三十三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ル可シ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日及場所ヲ記シ公證人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ場合ニ於テハ公證人及他ノ公證人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効チ有セス

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルトキハ原本ノ末尾ニ其旨ト年月日トヲ附記シ權利者ヲシテ署名捺印セシム可シ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルトキ管轄始審裁判所ノ認可ヲ經之ヲ原本トシテ保存ス可シ

第四十八條 數事件ヲ列記シ數人各自ニ關係チ異ニスル證書ハ權利者ノ請求ニ依リ其有用ノ部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式謄本ヲ作ルコトヲ得

正本又ハ正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡ス可カラス又抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ正本又ハ正式謄本ヲ渡スベカラス之ヲ渡スト雖モ其効チ有セス

第四十九條 正本又ハ正式謄本ハ管轄始審裁判所ノ命令アルニ非サレハ再度之ヲ渡スコトヲ得ス之ヲ渡スト雖モ其効チ有セス

再度以上正本又ハ正式謄本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シテ管轄始審裁判所ニ願出ツ可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存スル公證人ニ其正本又ハ正式謄本ヲ渡スコキコトヲ命スルトコトアル可シ  
其正本又ハ正式謄本ニハ幾度ノ正本又ハ正式謄本ナルコトヲ

末尾ニ附記シ公證人署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効  
ヲ有セス

第五十一條 證書ノ謄本及其附屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應  
シ之ヲ渡ス可シ

第五十二條 謄本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ謄本ト記シ公  
證人署名捺印ス可シ

第五十三條 抄録謄本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ住所氏名ヲ  
記シ末尾ニ抄録謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十四條 管轄始審裁判所ノ命令ニ依リ關係外ノ者ニ謄本ヲ  
渡シキルトキハ其命令書ヲ原本ニ連綴シ末尾ニ命令書ヲ受ケ  
タル旨並ニ年月日ヲ附記シ受取人ヲシテ署名捺印セシム可シ

第五十五條 公證人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ出  
出シ綴目合目ニ其所長ノ官印ヲ受ク可シ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第三十一條

及第三十三條ノ規定ニ從ヒ左ノ件ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公證人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シ

テ直ニ後任者ノ命セラレサル場合又ハ停職ノ場合ニ於テハ管

轄始審裁判所ハ近隣ノ公證人ニ命シテ其事務ヲ兼任セシム可

シ

役場ヲ廢シタルトキハ書類ノ引繼ヲ近隣ノ公證人ニ命ス可シ

第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ナキトキ其他必要ト見認

ムル場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印

ヲ爲ス可シ

第五十九條 公證人免職辭職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合ニ於

テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄ヲ作

リ共ニ署名捺印シテ授受ス可シ

死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡人ナキ場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ封印ヲ解キ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄ノ寫一通ヲ管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十條 公證人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲ爲スニ及ハス書類ノ保存ハ停職者之ヲ擔當ス可シ

兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡トキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ三日以内ニ自己ノ引繼キタルトキノ目錄ニ依テ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署名捺印ス可シ

受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其寫一通ヲ作り管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十二條 停職者復任スルトキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解任ヲ命ス可シ

第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ依テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ其受繼人タル旨ヲ附記ス可シ

第四章 手数料及旅費日當

第六十四條 公證人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手数料及旅費日當ヲ受クルコトヲ得

第六十五條 手数料ハ原本一枚ニ付キ貳拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ付キ拾錢但一行二十字二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行以下ハ半枚ヲ以テ算ス

第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ證書ノ草案ヲ渡シ後其原本ヲ作りタルトキハ草案ノ手数料ヲ別ニ請求スルコトヲ得ス

但其原本ヲ作ラサルトキハ原本手数料ノ半額ヲ受クルコトヲ得



得

第六十七條 公證人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ往テ職務ヲ行フ  
トキハ往返トモ旅費トシテ一里毎ニ貳拾錢ヲ受クルコトヲ得  
其職務ヲ行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ滯留ス  
ルトキハ日當七拾錢ヲ受クルコトヲ得

第六十八條 兼任者本任者ニ代リテ職務ヲ行フトキハ其手数料  
ハ總テ兼任者之ヲ受ク可シ

第六十九條 手数料ノ外證券印紙並ニ野紙ノ代價ハ囑託人ヨリ  
之ヲ受クルコトヲ得

第七十條 囑託人ノ求メアルキハ手数料等ノ計算書ヲ與フ可シ  
第七十一條 手数料等ニ係リ争ノ生シタルトキハ其金額ニ拘ハ  
ラス管轄始審裁判所ニ訴フ可シ

第五章 懲罰

第七十二條 公證人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於  
テ第七十三條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分

ス可シ

第七十三條 左ノ違犯ハ五拾錢以上壹圓九拾五錢以下ノ過料ニ  
處ス

第八條ニ違ヒタル時

第十一條ニ違ヒタル時

第十三條ニ違ヒタル時

第三十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時

第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第三十二條ノ第一項ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第一項ニ違ヒ讀聞セシコトヲ記入セス又ハ肩書

ヲ爲サ、リシ時

第三十五條ニ違ヒタル時

第四十條ニ違ヒタル時

第四十一條ニ違ヒタル時

第四十二條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十六條ニ違ヒタル時

第五十二條ニ違ヒタル時

第五十三條ニ違ヒタル時

第五十四條ニ違ヒタル時

第五十五條ニ違ヒタル時

第五十九條ノ第四項ニ違ヒタル時

第六十一條ニ違ヒタル時

第六十三條ニ違ヒタル時

第七十四條 左ノ違犯ハ貳圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス

第四十三條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十九條ノ第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上參拾圓以下ノ過料ニ處ス

第二條ニ違ヒタル時

第七條ニ違ヒタル時

第十條ノ第二項ニ違ヒタル時

第二十八條ニ違ヒタル時

第三十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時

第三十三條ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第三十六條ニ違ヒタル時

第三十七條ニ違ヒタル時

第三十八條ニ違ヒタル時

第三十九條ニ違ヒタル時

第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停職ニ處ス

第四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第十五條ニ違ヒタル時

第十六條ニ違ヒタル時  
第十七條ニ違ヒタル時

第七十七條 公證人前數條ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アルトキハ管轄控訴院ニ抗告スルコトヲ得但抗告ハ其處分ノ執行ヲ停止スルノ効力ナキモノトス

第七十八條 公證人停職ニ當ル所爲三度ニ及ヒタルトキハ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條ノ第一第二第三ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身許保證金ヲ差入レサルトキ亦前項ニ同シ

第七十九條 公証人此規則ヲ犯シタルニ依リ他人ニ損害ヲ生セシメタルトキハ之ヲ賠償ス可シ

第二節 公證人施行條例ノ件

◎司法省令甲第二號 明治十九年八月三十日  
公證人規則施行條例

第一條 公證人一受持區ニ五名以下ヲ置クモノトス

但土地ノ情況ニ因リ五名以下ヲ増置スルコトアルヘシ若シ公證人ノ員數不足スルトキハ受持區ニ依リテハ全ク之ヲ置カサルコトアル可シ

第二條 公證人ハ其受持區内ニ於テ住居セント欲スル町村ヲ定メ其願書ヲ始審裁判所ニ差出シ控訴院ヲ經テ司法大臣ノ認可ヲ請フ可シ

始審裁判所長及控訴院長ハ公證人ヨリ差出タル住居願ニ意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ送達ス可シ

司法大臣ニ於テ公證人ヨリ願出タル住居ヲ認可セサルトキハ直チニ其住居ス可キ町村ヲ指定ス

第三條 公證人既ニ住居ノ認可ヲ受ケタル後火災其他ノ事故アリテ他ニ轉居セントスルトキモ亦前條ノ手續ニ從フ可シ

第四條 公證人ノ役場ニハ公證人某役場ト記セル表札ヲ掲ク可シ役場ニハ成可ク倉庫又ハ堅牢ナル建物ヲ以テ書類保存ノ所ト

爲スヲ要ス

書類ハ常ニ書籍ニ藏メ非常持退ノ準備ヲ爲シ置ク可シ

第五條 公證人規則ニ從ヒ試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験願書

ニ履歷書ヲ添ヘ試験期日ノ告示アリタルヨリ試験期日一箇月

前マテニ試験ヲ行フ控訴院若クハ始審裁判所ニ差出ス可シ

試験願書及履歷書ニハ本籍區長若クハ戸長ノ奥書ヲ受ク可シ

第六條 試験ハ各所同時ニ之ヲ行フモノトス

第七條 試験委員ハ筆記試験ノ答按ヲ調査シ其合格不合格ヲ決

定シタル後口述試験ヲ行フ可シ

筆記試験ニ合格セサル者ニ付テハ口述試験ヲ行ハス

第八條 試験問題答按ノ適否ハ試験委員ノ判断ニ決スルモノト

ス

試験ノ結果ハ筆記口述二種ノ總點ニ依リ之ヲ定ム可シ

第九條 試験委員ハ口述試験ノ大略及試験全體ノ結果ヲ記録ニ

記載ス可シ

第十條 試験ニ及第シタル者ニハ試験委員ノ連署シタル及第証

書ヲ授與ス可シ

試験ヲ行フタル控訴院若クハ始審裁判所ハ試験及第人名簿ヲ

製シ之ニ及第者ノ住所族籍氏名年齢及ヒ及第ノ年月日ヲ登録

ス可シ

第十一條 試験委員ハ試験ニ關スル一切ノ書類ヲ其試験ヲ行フ

タル始審裁判所若クハ控訴院ノ長ニ差出ス可シ

始審裁判所ニ於テ試験ヲ行フタルトキハ其裁判所長ハ及第者

ニ關スル一切ノ書類ニ意見ヲ附シテ控訴院ニ送致シ控訴院長

モ亦意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可シ

控訴院ニ於テ試験ヲ行フタルトキハ前項ノ書類ニ控訴院長ノ

意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可シ

第十二條 公證人タラント欲スル者ハ其願書ニ試験及第證書官

記學位記卒業證書又ハ免許狀ノ寫及丁年者二名以上ニテ品行

ヲ保証スル證書ヲ添ヘ之ヲ差出ス可シ

試驗及第證書ヲ要セサル出願人ハ別ニ履歷書ヲ添フ可シ

第十三條 公證人願ヲ受タル始審裁判所ノ裁判所長及上席檢事ハ出願人ノ身上ニ付品行ノ正否理財ノ整否等詳細ノ取調ヲ爲シ控訴院ニ送致シ控訴院長及檢事長モ亦意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第十四條 公證人願書ヲ直チニ控訴院ニ差出タルハ控訴院長及檢事長ハ前條ノ取調ヲ爲シ且ツ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第十五條 公證人願書ニハ其職務ヲ行ハント欲スル地ヲ明記ス可シ

第十六條 司法大臣公證人ヲ任スルトキハ辭令書ヲ其公證人ノ職務ヲ行フ可キ地ノ管轄控訴院及始審裁判所ヲ經テ本人ニ下付ス

控訴院及始審裁判所ニ於テハ公證人名簿ヲ備置キ公證人ニ任セラレタル者ノ住所族籍氏名年齢及任地ヲ記録ス可シ

第十七條 公證人ニ任セラレタル者ハ身元保證金トシテ現金又ハ相當ノ價格アル公債書若クハ日本銀行株券ヲ管轄始審裁判所ニ納ム可シ

第十八條 公證人ノ納ム可キ身元保證金ノ額ハ左ノ如シ

東京及大坂他ノ地方ニ於テハ 金五百圓

人口貳拾萬以上アル受持區 金四百圓

人口貳拾萬未滿拾萬以上アル受持區 金參百圓

人口拾萬未滿アル受持區 金貳百圓

前項ノ金額ハ人口ニ増減アリト雖モ既ニ完納シタルモノハ之ヲ増減セズ

第十九條 公證人ハ身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ完納セサル間ハ其職務ヲ行フヲ得ズ公證人任命ノ辭令書ヲ受取タルヨリ三十日以内ニ身元保證金ヲ完納セサルトキハ公證人規則第七十八條第二項ニ依リ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條 公證人ノ身元保證金ハ公證人規則第五章ニ定ムアル

過料其他賠償ノ抵保ニ充ツルモノトス

第二十一條 過料賠償其他ノ事故ニ依リ身元保證金ノ全部又ハ一部ヲ減消シタルトキハ管轄始審裁判所長ハ速ニ保證金ヲ補充ス可キ旨ヲ公証人ニ命ス可シ

公証人保證金ヲ補充スルマテ始審裁判所長ハ假ニ職務施行ノ停止ヲ命スルコトヲ得此場合ニ於テ速ニ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

公証人保證金補充ノ命令ヲ受ケ六十日ヲ過キ之ヲ補充セサルトキハ始審裁判所長ハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ具申シ免職ノ處分ヲ請フ可シ

第二十二條 公証人他ノ役場ニ轉スル場合ニ於テ其保證金ニ不足ヲ生スレハ之ヲ補充セシメ若シ餘分アレハ之ヲ還付ス可シ

第二十三條 公証人其職務ヲ罷タルトキハ身元保證金ヲ還付ス可シ

第二十四條 公証人死去失踪シ又ハ停職ノ處分ヲ受ケタルトキハ管轄始審裁判所ハ控訴院ヲ經由シ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

停職者復任シタルトキモ亦前項ノ手續ニ從フ可シ

第二十五條 公証人死去失踪停職復任辭職免職又ハ轉職シタル時ハ始審裁判所及控訴院ハ其旨ヲ公証人名簿ニ記入ス可シ

第二十六條 公証人規則ニ定メアル懲罰處分ハ民事裁判所之ヲ管轄シ刑法及治罪法ノ例ヲ用ヒス

第二十七條 公証人試驗願書式履歷書式及公証人願書式ハ左ノ如シ

第一 公証人試驗願書式  
公証人試驗願 (料紙美濃紙)  
族籍(戸主嗣子又ハ二三男兄弟ヲ別)  
氏 名  
年 齡

私儀公証人試驗相受度此段奉願候也

年月日

氏名印

現住所

某控訴院長誰殿又ハ某始審裁判所長誰殿  
前書ノ通於籍年齡等相違無之候也

年月日

區長又ハ戶長印

本籍

第二 履歷書式

履歷書 (料紙美濃紙)

族籍

氏名

年齢

一 何年何月ヨリ何年何月迄(府縣)何某ニ就キ又ハ公私何學

校何塾ニ於テ何學修業

一 何年何月何々職業仕官進退賞罰等ニ關スル一切ノ件

一 公証人規則第二十條ノ各項ニ相觸候儀一切無之候

年月日

氏名印

前書之通相違無之候也

本籍

年月日

區長又ハ戶長印

第三 公証人願書式

公証人願書

(料紙美濃紙)

族籍(戶主嗣子又ハ二三男兄弟ノ別)

氏名

年齢

私儀何(府縣)何國某治安裁判所管下公証人受持區ニ於テ公証  
人ノ職務ヲ行ヒ度志願ニ有之候ニ付御登用被下度試験及第証  
書(官記學位記)卒業証書免許狀ノ寫及ヒ品行保證書相添此段  
奉願候也

年月日

氏名印

現住所

司法大臣誰殿

又

私儀何府縣何國某治安裁判所管下及何府縣何國某治安裁判所管下(某始審裁判所管下又ハ某控訴院管下)ノ内何レノ公証人受持區ニ於テナリトモ御命令ニ從ヒ公証人ノ職務ヲ行ヒ度志願ニ有之候ニ付御登用被下度試験及第証書(官記學位記卒業証書免許狀)ノ寫及ヒ品行保證書相添此段奉願候也  
前後ノ式ハ前ニ同シ

第三節 公証人試験願書差出期日ノ件

◎執達吏和久利銀次郎問合

公証人規則施行條例第五條ニヨレハ公証人試験願書ハ期日公告ヨリ試験期日一ケ月前マテニ差出スヘシトアリシカ公証人規則第二十一條ノ試験場所及期日告示前ト雖モ試験願書ヲ差出スコトヲ得ルヤ

◎執達吏傳習教官今村信行回答

期日公告アリタル後一ケ月間ヲ以テ試験願書差出ノ期間トス

第四節 抗告手續ノ件

◎司法省令甲第三號 明治十九年十一月九日

抗告手續

- 第一條 登記官吏又ハ公証人ノ職務執行ニ關シ抗告ヲ爲ス者ハ抗告狀ヲ其登記官吏又ハ公証人ニ差出ス可シ
- 第二條 登記官吏又ハ公証人抗告狀ヲ受取リタルトキハ其翌日ヨリ三日以内ニ意見ヲ附シ且ツ關係書類ノ寫ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送置スヘシ
- 第三條 登記官吏若シ前條ノ期限内ニ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致セサルトキ又ハ急速ヲ要スル場合ニ於テハ抗告者ハ直チニ管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出スコトヲ得
- 始審裁判所ハ抗告ヲ受ケタル登記官吏又ハ公証人ヲシテ意見



書ヲ差出サシメ及關係書類ヲ求ムルコトヲ得

第四條 登記官吏又ハ公証人及其職務執行上ニ關シ抗告ヲ受ケタルトキハ其處分ヲ停止ス可シ

第五條 抗告ヲ受ケタル管轄始審裁判所ハ書面ニ依リ判定ヲ爲スヘシ

始審裁判所ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ抗告者其他關係人ニ書面ヲ以テ答辯セシムルコトヲ得

第六條 始審裁判所ハ抗告ノ判定書ヲ管轄治安裁判所ニ送致シ之ヲ登記官吏又ハ公証人及ヒ抗告者ニ送付セシムヘシ

始審裁判所ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定ナシタルトキハ登記官吏又ハ公証人ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正スヘシ

第七條 公証人懲罰處分ニ對シ不服アル者ハ其處分ノ翌日ヨリ起算シ七日内ニ其處分ヲ爲シタル管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出ス可シ

裁判所ハ其抗告ヲ正當ナリト認ムルトキハ速ニ其不服ノ點ヲ

更正ス可シ若シ之ヲ正當ナラズト認ムルトキハ第二條ノ期日内ニ意見ヲ附シ關係書類ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄控訴院ニ送致スヘシ

第八條 公証人懲罰處分ニ對スル抗告ニ付テモ亦第三條ノ手續ニ依ルコトヲ得

第九條 公証人懲罰處分ニ對スル抗告狀ヲ受ケタル控訴院ハ第五條ノ手續ニ從ヒ判定ヲ爲ス可シ

第十條 控訴院ハ其判定書ノ處分ヲ爲シタル始審裁判所ニ送致シ之ヲ言渡サシム可シ

控訴院ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ處分ヲ爲シタル始審裁判所ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正スヘシ

第十一條 抗告ノ判定ニ對シテハ總テ上訴ヲ爲スヲ得サルモノトス

第十六篇 代人規則篇

◎布告第二百十五號 明治六年六月十八日

代人規則

第一條 凡ソ何人ニ限ラス已ノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ

但シ本人幼年等ニシテ其事理ヲ辨シ難キ時ハ其後見人及親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二條 凡他人ノ委任ヲ受ケ其事權ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ責タルヘシ

第三條 凡代人ハ心術正實ニシテ滿廿歲以上ノ者ヲ撰ムヘシ

第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ルモノトス

第五條 凡本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲ント欲スル時ハ必ス實印ヲ押シタル委任狀ヲ與フ可シ

但其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載ス可シ

第七條 委任狀書式左ノ通

拙者(拙者共)儀某ノ事件ニ付何誰ヲ以テ(總理代人部理代人)ト定メ拙者ノ名義ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事

一何々ノ事(但權限ノ次第ヲ分條記載ス可シ)右代理ノ委任狀仍而如件

年號何年何月何日

住所身分

姓 名 印

後見人等ハ住所身分何誰ノ後見

人何誰ト記ス可シ

第八條 代人ヲ任スルノ權限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスル時ハ其地方ニ新開

紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

第十七篇 布告布達到達日數篇

◎太政官布達第十四號 明治十六年五月二十六日

太政官布達 明治十六年五月二日 今般第十七號ヲ以テ布告布達施行

期ヲ改定廢止ニ付明治十九年勅令第一號參照シタルニ付到達日數左ノ通之ヲ定ム

京都府	四日	大坂府	四日	神奈川縣	即日
兵庫縣	四日	長崎縣	十一日	新潟縣	五日
埼玉縣	即日	群馬縣	即日	千葉縣	即日
茨城縣	二日	栃木縣	二日	三重縣	四日
奈良縣	四日	愛知縣	三日	靜岡縣	二日
山梨縣	二日	滋賀縣	四日	岐阜縣	四日
長野縣	四日	宮城縣	五日	福島縣	四日

岩手縣	七日	青森縣	十日	山形縣	五日
秋田縣	八日	福井縣	八日	石川縣	七日
富山縣	六日	鳥取縣	七日	島根縣	八日
岡山縣	六日	廣島縣	七日	山口縣	八日
和歌山縣	六日	德島縣	六日	香川縣	九日
愛媛縣	九日	高知縣	八日	福岡縣	九日
大分縣	十一日	佐賀縣	十一日	熊本縣	十一日
宮崎縣	十一日	鹿島縣	十二日		

但富山、佐賀、宮崎ノ三縣ハ開廳ノ日マテ舊官廳ノ到達日數ニヨル

第十八篇 法例篇

◎法律第十號 明治三十一年六月十五日

此法律ハ明治三十一年七月十六日ヨリ之ヲ施行ス

明治廿三年法律第九十七號法例ハ此法律發布ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

法例

第一條 法律ハ公布ノ日ヨリ起算シ滿二十日ヲ經テ之ヲ施行ス但法律ヲ以テ之ニ異リタル施行時期ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

臺灣、北海道、沖繩縣其他島地ニ付テハ勅令ヲ以テ特別ノ施行時期ヲ定ムルコトヲ得

第二條 公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反セサル慣習ハ法令ノ規定ニ依リテ認メタルモノ及ヒ法令ニ規定ナキ事項ニ關スルモノニ限り法律ト同一ノ効力ヲ有ス

第三條 人ノ能力ハ其本國法ニ依リテ之ヲ定ム  
外國人カ日本ニ於テ法律行為ヲ爲シタル場合ニ於テ其外國人カ本國法ニ依レハ無能力者タルヘキトキト雖モ日本ノ法律ニ依レハ能力者タルヘキトキハ前項ノ規定ニ拘ハラズ之ヲ能力者ト見做ス  
前項ノ規定ハ親族法又ハ相續法ノ規定ニ依ルヘキ法律行為及

ヒ外國ニ在ル不動産ニ關スル法律行為ニ付テハ之ヲ適用セス  
第四條 禁治產ノ原因ハ禁治產者ノ本國法ニ依リ其宣告ノ効力ハ宣告ヲ爲シタル國ノ法律ニ依ル

日本ニ住所又ハ居所ヲ有スル外國人ニ付キ其本國法ニ依リ禁治產ノ原因アルトキハ裁判所ハ其者ニ對シテ禁治產ノ宣告ヲ爲スコトヲ得但日本ノ法律カ其原因ヲ認メサルトキハ此限ニ在ラス

第五條 前條ノ規定ハ準禁治產ニ之ヲ準用ス

第六條 外國人ノ生死カ分明ナラサル場合ニ於テハ裁判所ハ日本ニ在ル財産及ヒ日本法律ニ依ルヘキ法律關係ニ付テノミ日本ノ法律ニ依リテ失踪ノ宣告ヲ爲スコトヲ得

第七條 法律行為ノ成立及ヒ効力ニ付テハ當事者ノ意思ニ從ヒ其何レノ國ノ法律ニ依ルヘキカヲ定ム  
當事者ノ意思カ分明ナラサルトキハ行為地法ニ依ル

第八條 法律行為ノ方式ハ其行為ノ効力ヲ定ムル法律ニ依ル

行爲地方ニ依リタル方式ハ前項ノ規定ニ拘ハラズ之ヲ有効ト  
ス但物權其他登記スヘキ權利ヲ設定シ又ハ處分スル法律行爲  
ニ付テハ此限ニ在ラス

第九條 法律ヲ異ニスル地ニ在ル者ニ對シテ爲シタル意思表示  
ニ付テハ其通知ヲ發シタル地ヲ行爲地ト看做ス

契約ノ成立及ヒ効力ニ付テハ申込ノ通知ヲ發シタル地ヲ行爲  
地ト看做ス若シ其申込ヲ受ケタル者カ承諾ヲ爲シタル當時申  
込ノ發信地ヲ知ラサリシトキハ申込者ノ住所地ヲ行爲地ト看  
做ス

第十條 動産及ヒ不動産ニ關スル物權其他登記スヘキ權利ハ其  
目的物ノ所在地法ニ依ル

前項ニ掲ケタル權利ノ得喪ハ其原因タル事實ノ完成シタル當  
時ニ於ケル目的物ノ所在地法ニ依ル

第十一條 事務管理不當利得又ハ不法行爲ニ因リテ生スル債權  
ノ成立及ヒ効力ハ其原因タル事實ノ發生シタル地ノ法律ニ依

ル

前項ノ規定ハ不法行爲ニ付テハ外國ニ於テ發生シタル事實カ  
日本ノ法律ニ依レハ不法ナラサルトキハ之ヲ適用セス外國ニ  
於テ發生シタル事實カ日本ノ法律ニ依リテ不法ナルトキト雖  
モ被害者ハ日本ノ法律カ認メタル損害賠償其他ノ處分ニ非サ  
レハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第十二條 債權讓渡ノ第三者ニ對スル効力ハ債務者ノ住所地法  
ニ依ル

第十三條 婚姻成立ノ要件ハ各當事者ニ付キ其本國法ニ依リテ  
之ヲ定ム但其方式ハ婚姻舉行地ノ法律ニ依ル

第十四條 婚姻ノ効力ハ夫ノ本國法ニ依ル  
外國人カ女戸主ト入夫婚姻ヲ爲シ又ハ日本人ノ婿養子ト爲リ  
タル場合ニ於テハ婚姻ノ効力ハ日本ノ法律ニ依ル

第十五條 夫婦財產制ハ婚姻ノ當時ニ於ケル夫ノ本國法ニ依ル

外國人カ女戸主ト入夫婚姻ヲ爲シ又ハ日本人ノ婿養子ト爲リタル場合ニ於テハ夫婦財産制ハ日本ノ法律ニ依ル

第十六條 離婚ハ其原因タル事實ノ發生シタル時ニ於ケル夫ノ本國法ニ依ル但裁判所ハ其原因タル事實カ日本ノ法律ニ依ルモ離婚ノ原因タルトキニ非サレハ離婚ノ宣告ヲ爲スコトヲ得ス

第十七條 子ノ嫡出ナルヤ否ヤハ其出生ノ當時母ノ夫ノ屬シタル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム若シ其夫カ子ノ出生前ニ死亡シタルトキハ其最後ニ屬シタル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム

第十八條 私生ヲ認知ノ要件ハ其父又ハ母ニ關シテハ認知ノ當時父又ハ母ノ屬スル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定メ其子ニ關シテハ認知ノ當時子ノ屬スル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム

第十九條 養子縁組ノ要件ハ各當事者ニ付キ其本國法ニ依リテ之ヲ定ム養子縁組ノ効力及ヒ離縁ハ養親ノ本國法ニ依ル

第二十條 親子間ノ法律關係ハ父ノ本國法ニ依ル若シ父アラサルトキハ母ノ本國法ニ依ル

第二十一條 扶養ノ義務ハ扶養義務者ノ本國法ニ依リテ之ヲ定ム

第二十二條 前九條ニ掲ケタルモノ、外親族關係及ヒ之ニ因リテ生スル權利義務ハ當事者ノ本國法ニ依リテ之ヲ定ム

第二十三條 後見ハ被後見人ノ本國法ニ依ル  
日本ニ住所又ハ居所ヲ有スル外國人ノ後見ハ其本國法ニ依レハ後見開始ノ原因アルモ後見ノ事務ヲ行フ者ナキトキ及ヒ日本ニ於テ禁治産ノ宣告アリタルトキニ限り日本ノ法律ニ依ル

第二十四條 前條ノ規定ハ保佐ニ之ヲ準用ス

第二十五條 相續ハ被相續人ノ本國法ニ依ル

第二十六條 遺言ノ成立及ヒ効力ハ其成立ノ當時ニ於ケル遺言者ノ本國法ニ依ル

遺言ノ取消ハ其當時ニ於ケル遺言者ノ本國法ニ依ル

前二項ノ規定ハ遺言ノ方式ニ付キ行為地法ニ依ルヲ妨ケス  
第二十七條 當事者ノ本國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其當事者カ  
二個以上ノ國籍ヲ有スルトキハ最後ニ取得シタル國籍ニ依リ  
テ其本國法ヲ定ム但シ其一カ日本ノ國籍ナルトキハ日本ノ法  
律ニ依ル

國籍ヲ有セサル者ニ付テハ其住所地法ヲ以テ本國法ト看做ス  
其住所カ知レサルトキハ其居所地法ニ依ル

地方ニ依リ法律ヲ異ニスル國ノ人民ニ付テハ其者ノ屬スル地  
方ノ法律ニ依ル

第二十八條 當事者ノ住所地法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其住所カ  
知レサルトキハ其居所地方ニ依ル

前條第一項及ヒ第三項ノ規定ハ當事者ノ住所地法ニ依ルヘキ  
場合ニ之ヲ準用ス

第二十九條 當事者ノ本國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其國ノ法律  
ニ從ヒ日本ノ法律ニ依ルヘキトキハ日本ノ法律ニ依ル

第三十條 外國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其規定カ公ノ秩序又ハ  
善良ノ風俗ニ反スルトキハ之ヲ適用セス

第十九條 競賣法篇

◎法律第十五號 明治三十一年六月十五日  
競賣法

第一章 通則

第一條 競賣ノ申込ハ他ノ高價競賣ノ申込アリタルトキ又ハ競  
落ヲ爲サスシテ競賣ヲ終了シタルトキハ當然其効力ヲ失フ

第二條 競買人ハ競落ニ因リテ競賣ノ目的タル權利ヲ取得ス  
競賣ノ目的ノ上ニ存スル先取特權及ヒ抵當權ハ競落ニ因リテ  
消滅ス

競買人ハ留置權者、競賣人ニ對シテ優先權ヲ有スル質權者及  
ヒ其質權者ニ對シテ優先權ヲ有スル債權者ニ辨濟スルニ非サ  
レハ競賣ノ目的物ヲ受取ルコトヲ得ス

第二章 動産ノ競賃

第三條 動産ノ競賃ハ留置權者、先取特權者、質權者其他民法又ハ商法ノ規定ニ依リテ其競賃ヲ爲サントスル者ノ委任ニ因リ競賃ヲ爲スヘキ地ノ區裁判所所屬ノ執達吏之ヲ爲ス

前項ノ委任ハ書面ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス

第四條 競賃ノ委任ヲ受ケタル執達吏ハ其競買人ト爲ルコトヲ得ス

債權者ノ委任ニ因リテ競賃ヲ爲ス場合ニ於テハ債務者ハ現金ヲ以テ代價ヲ提供スルニ非サレハ其競買ノ申込ヲ爲スコトヲ得ス

第五條 競賃ハ競賃ニ付スヘキ物ノ現在地ニ於テ之ヲ爲ス但其地ニ於テ相當ノ代價ヲ得ル見込ガキトキハ他所ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得

第六條 競賃ノ目的ハ執達吏カ其委任ヲ受ケタルトキ直チニ之ヲ定ムルコトヲ要ス但直チニ之ヲ定ムルコト能ハサル事情ア

ルトキハ此限ニ在ラス

第七條 競賃ノ場所及ヒ日時ハ豫メ之ヲ公告スルコトヲ要ス公告ハ競賃ニ付スヘキ物ノ品質及ヒ價格ニ準シ競賃地ニ於ケル適當ノ方法ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

公告ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一 競賃委任者ノ氏名住印

二 競賃ニ付スヘキ物ノ種類數量及ヒ品質

三 競賃ノ條件ヲ定メタルトキハ其條件

四 競賃ノ場所及ヒ年月日時

五 競賃ノ委任ヲ受ケタル執達吏ノ氏名住所

委任者カ競賃ノ條件ヲ定メサリシトキハ民事訴訟法第五百七十七條第三項ノ規定ヲ準用ス

第八條 競賃ノ場所及ヒ日時ハ競賃ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル者ニ對シテ其通知ヲ發スルコトヲ要ス但通知ヲ受クヘキ者ノ住所又ハ居所カ知レサルトキハ此限ニ在ラス



第九條 公告ト競賣トノ間ニハ五日以上ノ期間ヲ存スルコトヲ要ス但競賣ニ付スヘキ物ニ關シ之ヨリ速ニ競賣ヲ爲スコトヲ要スル特別ノ事情アルトキハ此限ニ在ラス

第十條 高價品ノ競賣ハ鑑定人ヲシテ其評價ヲ爲サシメタル後之ヲ爲スコトヲ要ス

第十一條 金銀及ヒ金銀ノ製品ハ地金銀ノ相場以下ノ代價ヲ以テ之ヲ競賣スルコトヲ得ス

第十二條 金銀及ヒ金銀ノ製品ハ地金銀ノ相場以下ノ代價ヲ以テ之ヲ競賣スルコトヲ得ス

第十三條 競賣ハ其條件ヲ告知シ各競賣物ニ付キ競買ノ申込ヲ得

第十四條 競買ノ告知ハ最高價競買ノ申込ヲ三回呼上ケタル後之ヲ爲ス

第十五條 競買ノ告知ハ最高價競買ノ申込ヲ三回呼上ケタル後之ヲ爲ス

催告スルニ始マリ最高價競買ノ申込人ニ對シ競落ノ告知ヲ爲スニ因リテ終了ス

競落ノ告知ハ最高價競買ノ申込ヲ三回呼上ケタル後之ヲ爲ス第十四條 執達吏ハ競賣調書ヲ作り之ニ左ノ事項ヲ記載シ署名捺印スヘシ

- 一 競賣委任者ノ氏名住所
- 二 競賣ニ付スヘキ物ノ種類數量及ヒ品質
- 三 鑑定人ヲシテ評價ヲ爲サシメタルトキハ其評價額
- 四 競賣ノ場所及ヒ日時
- 五 第九條但書ノ事由アリタルトキハ其事由
- 六 利害ノ關係ヲ有スル者ニ通知ヲ發シタルコト若シ之ヲ發セザリシトキハ其事由
- 七 告知シタル競賣ノ條件
- 八 各競賣物ニ對スル競落人ノ氏名及ヒ其申込價額
- 九 競賣ヲ停止シタルトキ又ハ競落ヲ爲サザリシトキハ其事

由

十 競賣ノ開始及ヒ完結ノ日時

十一 競賣調書ヲ作リタル場所及ヒ年月日  
競賣調書ニハ委任者又ハ其代理人ヲシテ署名捺印セシメ且競賣ノ公告ヲ爲シ及ヒ通知ヲ發シタルコトヲ證スル書面及ヒ委任狀ヲ添附スルコトヲ要ス

執達吏ハ委任者ノ請求ニ因リ競賣調書ノ謄本ヲ交付スルコトヲ要ス

第十五條 執達吏ハ競賣ノ完結後得賣金ノ中ヨリ競賣ノ費用ヲ控除シ其殘金及ヒ競落セサリシ物ハ遲滞ナク之ヲ受取ルヘキ者ニ交付シ又ハ其者ノ爲メニ之ヲ供託スルコトヲ要ス

第十六條 執達吏ハ競賣ニ付キ正副二通ノ計算書ヲ作り其正本ハ計算ニ關スル證明書ト共ニ之ヲ委任者ニ交付シ其副本ハ之競賣調書ニ添附スヘシ

第十七條 競賣ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル者ハテ競賣ノ完結ニ

要ス此場合ニ於ケル競賣手續及ヒ保管ノ費用ハ委任者ノ負擔トス

第二十一條 競賣ノ委任ハ競落ノ告知アルマテ之ヲ取消スコトヲ得

前項ノ場合ニ於ケル競賣手續ノ費用ハ委任者ノ負擔トス

第三章 不動産ノ競賣  
第二十二條 不動産ノ競賣ハ留置權者先取特權者質權者抵當權者其他民法ノ規定ニ依リテ競賣ヲ爲サントスル者ノ申立ニ因リ不動産所在地ノ區裁判所之ヲ爲ス

民事訴訟法第六百四十一條第一項ノ規定ハ競賣ヲ爲スヘキ裁判所ノ管轄ニ之ヲ準用ス

第二十三條 申立人ハ競落期日マテハ最高價競買申込人ノ同意アル場合ニ限リ其申立ノ取下ヲ爲スコトヲ得

第二十四條 競賣ノ申立ハ書面ヲ提出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス申立書ニハ左ノ事項ヲ記載シ申立人又ハ其代理人之ニ署名捺

至ルマテ其手續ニ關スル執達吏ノ處分ニ付キ其所屬區裁判所ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得  
 異議ノ裁判ハ申立人ニ之ヲ通知スヘシ此裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス  
 異議ノ裁判ハ之ヲ以テ善意ノ競落人ニ對抗スルコトヲ得ス  
 第十八條 前條ノ規定ニ依リテ異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ハ競賣ノ停止ヲ命スルコトヲ得但停止ニ因リテ著シキ損害ヲ生スル虞アルトキハ此限ニ在ラス  
 第十九條 第三者カ競賣ノ目的物ニ關シテ訴ヲ提起シタルコトヲ證明シタルトキハ執達吏ハ其競賣ヲ停止スルコトヲ要ス  
 物ノ保管ニ付キ過分ノ費用ヲ要スルトキ又ハ遲滯ノ爲メ著シク物ノ價格ヲ減少スル虞アルトキハ執達吏ハ競賣ヲ續行シテ賣得金ヲ供託スルコトヲ得  
 第二十條 前二條ノ規定ニ依リテ競賣ヲ停止シタル場合ニ於テハ執達吏ハ相當ノ方法ヲ以テ競賣ノ目的物ヲ保管スルコトヲ

印スヘシ

- 一 債務者及ヒ所有者ノ氏名住所
  - 二 競賣ニ付スヘキ不動産ノ表示
  - 三 競賣ノ原因タル事由
  - 四 年月日
  - 五 裁判所
- 申立書ニハ競賣ニ付スヘキ不動産ニ關スル登記簿ノ謄本及ヒ代理人ニ依リテ申立ヲ爲ストキハ其委任狀ヲ添附スルコトヲ要ス
- 民事訴訟法第六百四十三條第一項第二號乃至第五號第二項及ヒ第三項ノ規定ハ第一項ノ申立ニ之ヲ準用ス
- 第二十五條 競賣手續ノ開始ハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス  
 開始決定ニハ申立人ノ氏名住所及ヒ前條第二項第一號乃至第四號ニ掲ケタル事項ヲ記載シ決定ヲ爲シタル判事之ニ署名捺印スヘシ

民事訴訟法第二百三十九條ノ規定ハ開始決定ニ之ヲ準用ス

第二十六條 裁判所ハ開始決定ヲ爲スト同時ニ職權ヲ以テ競賣ノ申立アリタルコトヲ競賣ニ付スヘキ不動産ニ屬スル登記簿ニ登記スヘキ旨ヲ其管轄登記所ニ囑託スヘシ

民事訴訟法第六百五十一條第二項第六百五十二條及ヒ第六百五十三條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十七條 裁判所カ開始決定ヲ爲シタルトキハ競賣期日及ヒ競落期日ヲ定メテ之ヲ公告スルコトヲ要ス

競賣ノ期日ハ競賣手續ノ利害關係人ニ之ヲ通知スルコトヲ要ス

左ニ記載シタル者ヲ利害關係人トス

- 一 申立人
- 二 債務者及ヒ所有者
- 三 登記簿ニ登記シタル不動産上ノ權利者
- 四 不動産上ノ權利者トシテ其權利ヲ證明シタル者

第二十八條 裁判所ハ鑑定人ヲシテ競賣ニ付スヘキ不動産ノ評價ヲ爲サシメ其評價ヲ以テ最低競賣價額トスヘシ

第二十九條 競賣期日ノ公告ニハ第二十二條ニ掲ケタル者ノ申立ニ因リテ競賣ヲ爲ス旨ノ外民事訴訟第六百五十八條第一號乃至第三號第五號乃至第七號第九號及ヒ第十號ニ掲ケタル事項ヲ記載スルコトヲ要ス

民事訴訟法第六百六十一條ノ規定ハ前項ノ公告ニ之ヲ準用ス

第三十條 競賣期日其開始競賣調書及ヒ競賣終局ノ告知ニ關スル民事訴訟法第六百五十九條第六百六十二條乃至第六百六十九條ノ規定ハ本章ノ競賣ニ之ヲ準用ス

第三十一條 競賣期日ニ相當ノ競賣申込ナキトキハ裁判所ハ更ニ期日ヲ定メテ競賣ヲ爲スヘシ此場合ニ於テハ民事訴訟法第六百七十條ノ規定ヲ準用ス

第三十二條 競賣期日ハ民事訴訟法第六百六十條ノ規定ニ從ヒ裁判所ニ於テ之ヲ開ク

現行法律彙編 卷之七十五 民事訴訟法 二〇五 民事訴訟法

落人ノ一續競落ヲ許サル場合ノ新競賣期日競賣ノ履及  
ヒ競人ノ義務不履行ノ場合ニ於ケル再競賣ニ關スル事  
訟第六百七十一條乃至第六百七十四條第六百七十六條乃至  
第六百八十三條第六百八十七條及ヒ第六百八十八條ノ規定ハ  
本章ノ競賣ニ之ヲ準用ス

第三十三條 競落人ハ競落ヲ許ス決定カ確定シタル後直チニ代  
價ヲ裁判所ニ支拂フコトヲ要ス此場合ニ於テハ裁判所ハ其裁  
判ノ際本ヲ添ヘ競落人カ取得シタル權利ノ移轉ノ登記ヲ管轄  
登記所ニ囑託スヘシ

裁判所ハ前項ノ代價ノ中ヨリ競賣ノ費用ヲ控除シ其殘金ハ遲  
滯テク之ヲ受取ルヘキ者ニ交付スルコトヲ要ス

第三十四條 裁判所ハ競賣期日ノ公告ヲ爲ス前申立ニ因リ競賣  
ニ代ヘテ入札拂ヲ爲スヘシ此場合ニ於テハ民事訴訟法第七百  
三條乃至第七百五條ノ規定ニ依ル外本章ノ規定ヲ準用ス  
第三十五條 競落ヲ爲サスシテ競賣手續ヲ完結シタルトキハ裁

判所ハ第二十六條ノ規定ニ依リテ爲シタル登記ノ抹消ヲ囑託  
スヘシ

第四章 船舶ノ競賣

第三十六條 登記シタル船舶ノ競賣ハ申立ニ因リ其當時ノ碇泊  
港又ハ船舶ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所之ヲ爲ス

第三十七條 競賣ノ申立書ニハ船舶所有者並ニ船長ノ氏名住所  
船舶ノ表示及ヒ競賣ノ原因ヲ記載シ且船舶登記簿ノ謄本及ヒ  
官ノ認可ヲ要スル場合ニ於テハ其認可ヲ得タルコトヲ證スル  
書面ヲ添附スルコトヲ要ス

第三十八條 競賣期日ノ公告ニハ申立ニ因リテ競賣ヲ爲ス旨ノ  
外船舶ノ外船舶ノ表示及ヒ其碇泊港又ハ現在ノ場所ヲ記載ス  
ルコトヲ要ス

第三十九條 前章ノ規定及ヒ民事訴訟法第七百十九條第七百二  
十條第二項第七百二十三條第七百二十五條ノ規定ハ船舶ノ競  
賣ニ之ヲ準用ス

第五章 增價競賣

第四十條 民法第三百八十四條ノ規定ニ依リテ抵當不動産ノ增價競賣ヲ請求スル債權者ハ第三取得者ニ競賣ノ請求ヲ送達シタル日ヨリ三日内ニ抵當不動産所在地ノ區裁判所ニ競賣ノ申出ヲ爲シ且擔保ノ認許ヲ求ムルコトヲ要ス

前項ノ規定ニ依ラサル競賣ノ請求ハ無効トス

第四十一條 競賣ノ申立書ニハ左ノ事項ヲ記載シ請求債權者之

ニ署名捺印スヘシ

- 一 債務者ノ氏名、住所
- 二 抵當不動産ノ表示
- 三 第三取得者及ヒ讓渡人ノ氏名、住所
- 四 擔保ノ表示
- 五 第三取得者カ提供シタル金額
- 六 請求者カ定メタル增價金額
- 七 年月日

八 裁判所

申立書ニハ民法第三百八十三條ノ送達ヲ受ケタル日ヲ證スル書面ヲ添付スルコトヲ要ス

民事訴訟法第六百四十三條第一項第三號乃至第五號第二項及ヒ第三項ノ規定ハ本條ノ申立ニ之ヲ準用ス

第四十二條 裁判所ハ擔保ノ許否ニ付キ期日ヲ定メ決定ヲ以テ其裁判ヲ爲スヘシ

期日ヨリハ請求債權者及ヒ第三取得者ヲ呼出タスヘシ  
擔保ノ裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四十三條 競賣ノ請求ハ擔保ヲ認許セサル裁判ニ因リテ當然其效力ヲ失フ

民法第三百八十四條ニ定メタル期間内ニ第三取得者ニ對シテ競賣ノ請求書ヲ送達シタル他ノ債權者ハ前項ノ裁判アリタル日ヨリ三日内ニ第四十條ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四十四條 裁判所カ擔保ヲ認許シタルトキハ競賣手續ノ開始

ノ決定ヲ爲スヘシ

決定ニハ認許シタル擔保ヲ表示シ且第四十一條第一項第一號乃至第三號第六號及ヒ第七號ニ掲ケタル事項ヲ記載スヘシ  
第二十五條第二項第三項及ヒ第二十六條第一項ノ規定ハ本條ノ決定ニ之ヲ準用ス

第四十五條 第二十七條第一項及ヒ第二項ノ規定ハ增價競賣ニ之ヲ準用ス左ニ記載シタル者ヲ利害關係人トス

- 一 競賣請求者
- 二 債務者

三 第三取得者及ヒ讓渡人

四 登記簿ニ登記シタル不動産上ノ權利者

第四十六條 競賣ノ公告ニハ增價競賣ノ申立ニ因リテ競賣ヲ爲ス旨及ヒ請求者ノ定メタル增價金額ノ外民事訴訟法第六百五十八條第一號乃至第三號第五號第七號第九號及ヒ第十號ニ掲

ケタル事項ヲ記載スヘシ

第三十三條及ヒ民事訴訟法第六百五十九條乃至第六百六十九條第六百七十一條乃至第六百七十四條第六百七十六條乃至第六百八十三條第六百八十七條ノ規定ハ本章ノ競賣及ヒ競落ノ手續ニ之ヲ準用ス

第四十七條 競賣期日ニ請求債權者カ定メタル增價金額ニ達スル競買ノ申込ナキトキハ請求債權者ヲ以テ競落人トス  
民事訴訟法第六百七十八條ノ規定ニ依リ最高價競買人カ其競買ヲ取消シタルトキハ裁判所ハ更ニ競賣期日及ヒ競落期日ヲ定メテ之ヲ公告スルコトヲ要ス

第四十八條 增價競賣ノ擔保ハ競落代價ノ完済ニ因リテ其効力ヲ失フ

第四十九條 裁判所ハ競賣請求者ノ申立ニ因リ競賣ニ代ヘテ入札拂ヲ爲スヘシ此場合ニ於テハ民事訴訟法第七百三條乃至第七百五條ノ規定ニ依ル外本章ノ規定ヲ準用ス

附 則  
第五十條 本法ハ明治三十一年七月十六日ヨリ之ヲ施行ス  
第五十一條 明治二十三年法律第九十二號增價競賣法ハ本法發  
布ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

現行執達吏法令大全第四卷(終)

明治三十一年七月十七日印刷  
明治三十一年七月廿七日發行

(初版ノニ非賣品)

編纂者 和久利銀次郎

宮崎縣宮崎郡宮崎町大字上  
別府二百三十番戶寄留

發行者 日 高 義 一

宮崎縣宮崎郡宮崎町大字上  
上野町百十番戶

印刷者 野 井 唯 吉

宮崎縣宮崎郡宮崎町大字上  
野町百三十四番戶

發行所 鳳

鳴 會  
宮崎縣宮崎郡宮崎町大字上  
別府二百三十二番戶





